群教セ	I01- 04
	平28.261集
	特－知的障害

知的障害特別支援学校高等部外国語科における、主体的なコミュニケーション態度の育成

――聞き取った内容や表現の方法が分かり、自信を持ってコミュニケーションがとれる学習活動の工夫――

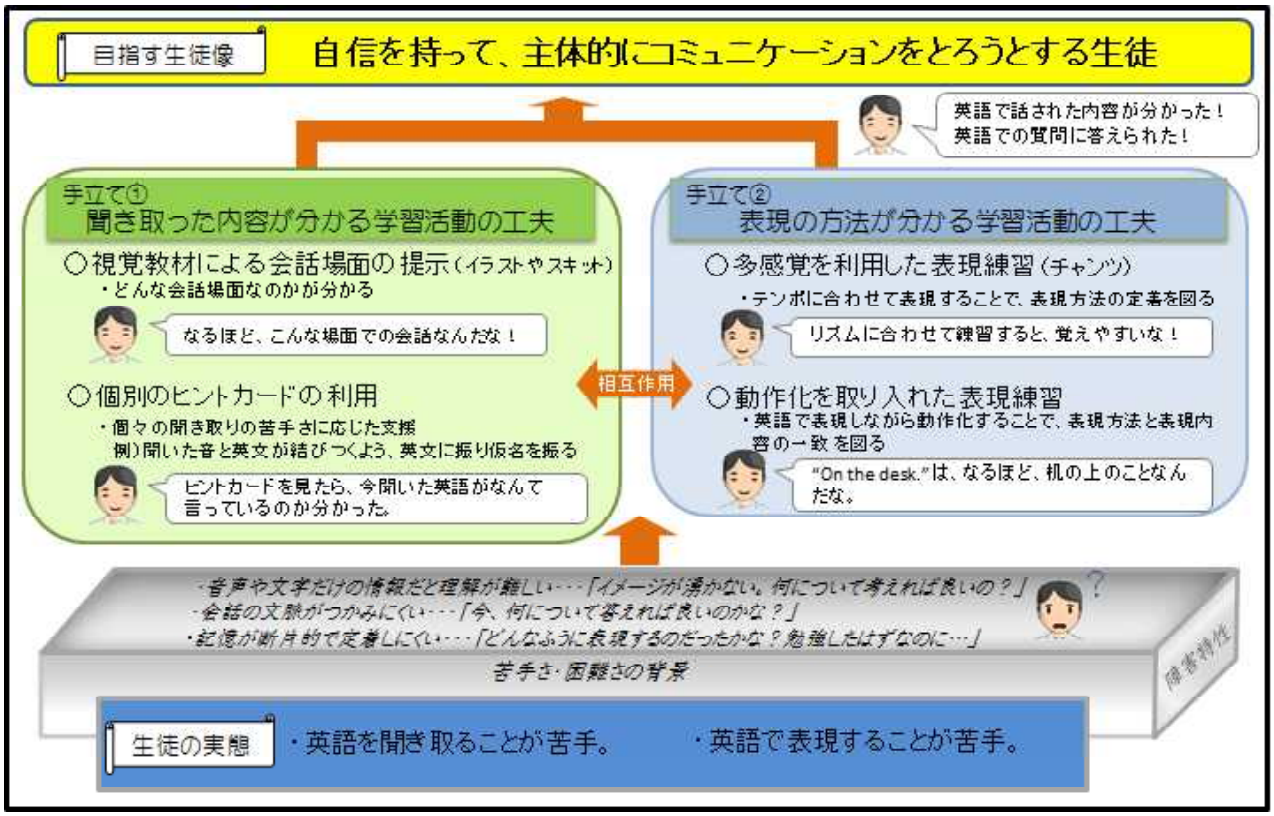
特別研修員　加藤　達也

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

知的障害特別支援学校高等部の教科「外国語」（以下、知的英語科）は、学校や生徒の実態を考慮し、必要に応じて設けることができるとされている。本校においても、生徒の実態等に応じ、週に一単位時間、知的英語科の授業を設定した教育課程を編成している。学習に取り組む生徒たちの様子を見ると、中学校（特別支援学級）までの英語の学習を通して、英語への興味は持っているものの、それ以上に苦手意識が高く、英語で相手とやりとりを行うといったコミュニケーションに係る活動では、どの生徒も消極的な姿が見られる状態にある。生徒たちには、「相手が何を言っているのか分からない」「伝えたいけど、伝え方が分からない」といった困難さが生じている様子がある。一方で、生徒たちの生活を見てみると、身の回りには、英語やローマ字があふれ、口ずさむ歌には英語が多く使われており、外出した際に外国人と触れ合う機会も増えている。こういった中で、簡単な英語を使ってコミュニケーションがとれるようになることは、生徒の生活を豊かにし、社会の変化に対応するために必要な力であると考える。そこで、本研究では、知的英語科の観点の一つである「会話（コミュニケーション）」に焦点を当て、特別支援学校高等部学習指導要領の外国語の内容の一段階（1）にある、「簡単な英語を使って表現したり、やりとりしたりする」を取り扱う上で、「聞き取った内容が分かる」、「表現の方法が分かる」といった視点から手立てを講じ、英語が伝わる楽しさを実感することで、英語における主体的なコミュニケーションを促していきたいと考えた。

Ⅱ　研究内容

1　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

本実践の対象となる生徒に英語の何が苦手かを聞き取ったところ、「(先生が) 何を言っているのか分からない」「(話して伝えたいけど) 何て言っていいのか分からない」と答えた生徒が多く見られた。生徒は一生懸命聞き取ろう、伝えようという意欲を持っていても、英語で聞いた内容が分からなかったり、どのように答えたら良いのか分からなかったりするために表現活動が消極的になってしまうことが考えられた。これらは、会話場面や文脈を捉えて内容を推測することの難しさ、音声や文字のみの情報だけで相手の話の内容を理解することの困難さ、記憶が断片的で定着しにくいために表現の仕方が分からないといった障害特性が主な要因ではないかと捉えた。そこで、これらの要因に配慮した授業作りをすることで、生徒たちの主体的なコミュニケーションの向上を図りたいと考え、以下の二つの視点から手立てを講ずることとした。

手立て１　聞き取った内容が分かる学習活動の工夫

・どんな場面での会話なのかを、言葉だけでなくイラストなどでも示したり、個々のつまずきに応じて英文に振り仮名を振るなどしたヒントカードを用意したりして、会話の内容がつかめるようにする。

手立て２　表現の方法が分かる学習活動の工夫

・単語や文を音やリズムに乗せて発音する練習（チャンツ）を取り入れるなど、多感覚を利用した表現練習を通して表現方法の定着を図る。

・″On the ○○.″といった状態を表す表現や上下左右といった方向を表す単語を学習する際には、表現や単語を動作化する活動を取り入れることで、表現の理解と定着を図る。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　学習する基本表現が、どのような会話場面で使われるのかを視覚的に示したことで、生徒は自身のこれまでの経験と照らし合わせて会話場面を理解し、どんな内容が話されているのかを聞き取ることができた。

○　個々の生徒の実態に応じた個別のヒントカードを用意したことで、会話の内容が分からないときには、ヒントカードにあるイラストや振り仮名を手掛かりにして会話の内容を理解しようとする姿が見られた。また、ヒントカードは、自らが表現する際の手掛かりとしても有効であった。

○　チャンツでは、リズムに乗りながら発音する心地よさを感じながら何度も練習に取り組めるようになった結果、基本表現が定着し自分から使うことができる生徒が増えた。また、これまでは声を出すことに消極的であった生徒も大きな声で発音するなど、自信を持って表現する姿が見られた。

○　実践前後のアンケートでは、「英語を聞き取る活動は得意ですか。苦手ですか。」「英語で話す活動は得意ですか。苦手ですか。」（４件法）という項目に対し、次のような変容があった。

・「聞くこと」…「とても得意・得意」　７人→　10人　増加
　　「少し苦手 ・ 苦手」　９人→　６人　減少

・「話すこと」…「とても得意・得意」　８人→　13人　増加
　　「少し苦手 ・ 苦手」　８人→　３人　減少　　※（回答者数はいずれも16名）

この他、「英語が好きですか」の質問に対して、「とても好き」と答えた生徒が、３人から７人に増加した。また、授業の様子からも、あいさつやチャンツによる発音練習、ゲームなどでの表現練習の際に、自信を持ってコミュニケーションをとろうとする生徒の姿が増えた。

２　課題

○　動作化して表現を理解する活動は、１、２回程度の取組では定着が難しいことが多く、継続的に取り組むことが効果的である。

○　状態や方向を表す英語表現は、英語による表現以前に、基になる上下左右等の抽象的な概念理解を図るような支援を併せて行うことが必要である。

○　実態に応じて、クラスごとに扱う表現や単語の数を変えるようにしたが、クラス内でも実態が多様なため、一人一人に応じた手立てを個別のヒントカード以外でも用意する必要がある。

実践例

１　単元名　「場所を尋ねよう」“Where is the ～?”（高等部第１学年・２学期）

２　本単元について

特別支援学校高等部学習指導要領第２章第２節第１款〔外国語〕１目標には、「外国語でコミュニケーションを図る基礎的な能力や態度を育てるとともに、外国語や外国への関心を深める」とある。本単元では、「内容」の１段階（１）「簡単な英語を使って表現したり、やりとりしたりする」を中心に扱う。

本単元では、“Where is the ～?”の表現を用いて物の在りかや目的地への行き方を尋ねたり、それに答えたりする英語表現を学習する。これらの会話は、英語に限らず、日常生活の中でよく行われる会話であり、生徒にとっては身近な表現である。第１時～第２時では、対象の物がどこにあるかを聞いたり、それに答えたりする活動に取り組む。学習の中で取り扱う“on the ～.”や″“in the ～.”といった物の位置を表す表現の理解のためには、英語表現の仕方だけでなく、上下や左右といった位置や方向の概念も求められ、生徒たちにとっては難しい表現であることが予想される。そこで、物の位置を表す表現を学習するに当たっては、実際に物をその位置に置くといった操作的な活動を取り入れ、表現と動作を一致させることで理解を促していきたい。また、“It's on the desk.”のように文法的に正しい表現だけにとらわれず、実際の会話でも使用される、端的な表現（″In the box.″ / ″On the desk.″等)を大切にし、英語を使って表現しようとする姿勢を身に付けさせたい。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標		英語で場所を尋ねたり、 答えたりすることができる。
評価規準	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	間違うことを恐れずに自分から場所を尋ねたり、答えたりしようとしている。
	外国語表現の能力	基本表現を使って、相手に場所を尋ねることができる。
	外国語理解の能力	位置や方向など、ポイントとなる表現を聞き取ることができる。
	言語や文化についての知識理解	英語での場所の尋ね方や答え方の表現を知ることができる。 ハロウィンの行事を通して、外国の文化を知る。
過程	時間	主な学習活動
表現理解	第１時	・相手に物の在りかを尋ねたり、答えたりする。
表現活用	第２時	EX) Where is the cookie? On the desk.
表現理解	第３時	・目的地への行き方を尋ねたり、説明したりする。
表現活用	第４時	EX) Where is the station? Go straight. Turn right.
表現理解	第５時	・相手にどこの国に行ってみたいかを尋ねたり、答えたりする。
表現活用	第６時	EX) Where do you want to go? I want to go ～.

３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全６時間計画の第１時に当たる。″Where″を用いた表現を最初に学習する時間であり、どのような場面で用いる表現なのかを理解するための重要な時間になる。また、″on″, ″in″, ″under″といった状態を表す表現を学習することは、生徒にとって抽象的な概念理解が必要になるという点で二重に理解が難しくなることが予想された。そこで、次のような学習活動の工夫を手立てとして取り入れた。

手立て１　聞き取った内容が分かる学習活動の工夫

・どんな場面での会話なのかをイラストや教師の寸劇（スキット）で示したり、個別のヒントカード（物の位置関係を示したイラストや学習する基本表現の英文に片仮名の振り仮名を振った、個別の支援カード）を用意したりすることで、生徒が聞き取った内容をつかめるようにする。

手立て２　表現の方法が分かる学習活動の工夫

・単語や文をリズムに乗せて発音する練習（チャンツ）を取り入れる。記憶の定着が難しい生徒も音

やリズムに乗せて発音するといった多感覚を利用した学習活動を取り入れることで、定着が図れるようにする。
・“on the desk.”の発音を聞いて実際に物を机の上に置くなどの動作化を行ったり、位置関係の理解を促すハンドサインやイラストを視覚的に示したりすることで、表現の理解と定着を図る。

４　授業の実際

本時の目標は、「英語で物の場所を尋ねたり、答えたりすることができる」「ハロウィンを体験し、外国の文化を知る」とした。本時がハロウィンの当日（10月31日）であることや、ここ数年、日本においても若者を中心に仮装をしてパーティーを楽しむ行事として広がりつつあり、生徒にとっても関心が高く、知的英語科の目標にある「外国語や外国への関心を深める」ために、最適な題材であると考えた。隠された菓子の在りかを英語で尋ねたり、答えたりするゲームを行ったり、“Trick or Treat.”の表現を使ったりするなどして、楽しみながら外国の文化に触れ、関心を高めたいと考えた。

(1)　本時の学習表現を知る（手立て１）

授業の冒頭において、学習で取り扱う表現（″Where ～?″）に関連する場面を大型テレビに映し出し、こんな場面ではどんな会話がされるだろうかといったことを生徒に問いかけた（図１）。登場するキャラクターが、どんな状況にあるか尋ねると、生徒は、自分の経験に照らし合わせて、「私のチョコはどこ」「（食べちゃったなら）同じの買ってきて」など、イラストで示された場面に合った会話を考え発表することができた。スキット（寸劇）では、先と同じ場面となるよう、ビデオで撮影した画面の中のキャラクターと教師がやりとりを行い、英語での表現の手本を示した（図２）。イラストによって多くの生徒が会話場面や会話の内容が理解できていたため、すぐに、教師の英語表現を聞いて表現を口ずさむ姿が見られた。

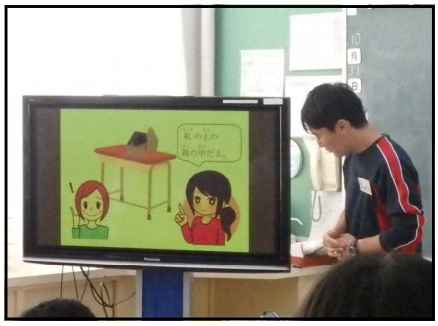


図１　イラストを使った場面理解

図２　スキットを使った表現理解

(2)　発音練習（手立て２）

新出単語や基本文の発音練習場面でチャンツを取り入れた。遅すぎず早すぎない100 BPM（一分間に100拍）程度のテンポと軽快なリズム音を使用することで、どの生徒も手足を使ってリズムを取りながら、楽しそうに発音することができていた。これまでの教師の後に続いて発音する練習では、２～３回程度しか発音する機会がなかった授業場面が、チャンツを取り入れたことで、生徒が１０回以上発音練習に取り組めるようになるとともに、より主体的な学習活動となった。

″on″,″in″,″under″といった状態を表す表現を学ぶ学習場面では、次頁図３・図４のようなハンドサインや状態を表したイラストなどの視覚支援に加え、物を実際にその場所に置かせる動作化も取り入れた（次頁図５）。しかし、ハンドサインによる支援は、生徒によっては、表現（″on～″,” in～″）とハンドサインの形がうまくイメージとして一致しなかったため、理解を促すまでにいかなかったケースがあった。また、動作化をする活動は、その回数が少なかったため、定着にいたらなかった生徒がいた。練習の方法を変え、繰り返し行うことが必要であった。

図３　″on～″のハンドサイン

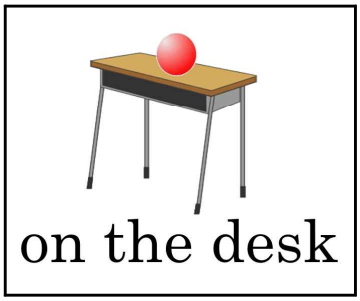


図４　状態を表すイラスト

図５　″on～″の動作化

(3)　宝探しゲーム（手立て①）

学習した表現を使って、菓子を探すゲームでは、図６のようなヒントカードを頼りに自力解決をしようとする生徒の姿が見られた。ヒントカードは、一人一人の実態に応じ、物の位置関係がイラストと英語表現で示されているもの、基本文の発音の仕方が片仮名で示されているものなどを用意した。″on″，″in″などは聞き取れていても、うまくその状態が分からずにいた生徒も、ヒントカードにあるイラストを見て、その位置関係を確認し、目的の物を見付けることができていた。また、ヒントカードは、表現する際の手掛かりとしても有効だった。

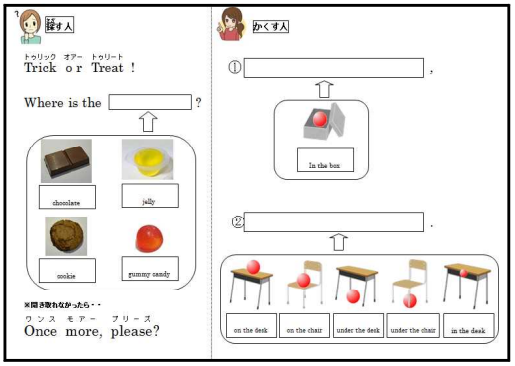


図６　個別のヒントカード

５　考察

これまでも、新出単語を取り上げる際には、イラストを用いた支援は行ってきていたが、新たな英語表現を学習する際には、「今日は〇〇について勉強します」といった言葉や文字で内容を説明していることが多くあった。しかし、授業後に、その時間に何の勉強をしたのか尋ねると、答えることができずにいた生徒の様子から、どんな場面での会話や表現なのかを理解した上で表現練習に取り組むことが大切なのではないかと考え、イラストやスキット等、視覚教材を基に、会話場面をどの生徒も理解できるよう支援を行った。「今日はどこにあるかを聞く勉強をするんだ」と理解した生徒は、学んだ表現を活用する場面において、自分から自信を持って表現することができるようになっていった。授業後、生徒に「今日は何の勉強をしましたか」と聞くと、「(探している物が）どこか聞く勉強をした」と答えた生徒が増えたことからも、生徒が会話場面を確実に理解して表現練習をすることが重要であると確認できた。

チャンツでリズムに乗せて単語や基本文を発音する活動は、日頃、消極的な生徒も大きな声で取り組むなど、どの生徒も主体的に取り組める活動になった。また、授業後にも、チャンツのリズムで表現を口ずさむ生徒の姿が見られるなど、定着も見られた。

状態を表す前置詞の理解が難しい生徒へは、イラストでその状態を示したり、英文に振り仮名を付けたヒントカードを用意したりしたことで、どの生徒も、自分で場所を聞き取り、物がどこにあるかを見付けようとする姿が見られた。個々の実態に応じ、ヒントカードを個別に用意したことは、生徒が表現や聞き取りを諦めてしまうことなく、何とか聞き取ろう、伝えようとする意欲を継続させることに有効であった。

ゲームの際に、″desk″と″chair″は聞き分けることができたが、状態を表す前置詞、″on″,″in″,″under″を聞き分けることが難しかった生徒が数名いた。イラストやハンドサインを用いて視覚的にも情報を補足したり、動作化して意味理解を促したりしたがうまくいかないことがあった。上下左右等の抽象的な概念理解が苦手な生徒に対しては、英語表現に対する支援だけでなく、基本的な概念理解への支援も考える必要があった。

実態に応じて、クラスごとに扱う表現や単語の数を変えるようにした。生徒の実態に応じて扱うものを変えることで、内容を理解して自信を持ってコミュニケーションをとろうとする生徒の姿が見られた。一方で、扱う内容を減らしたクラスで、チャンツは意欲的に取り組んだが表現が定着しない生徒がいた。ヒントカード以外にも、一人一人の実態に応じた個別の支援が必要であった。